



松下暉佳



土肥真人



松永怜志



吉田祐記



久湊行起

上本雄平



楠本奈生



柴田大吾さん



しょこたんさん

2023/08/07~09

多摩川 138km 人力の旅の記録

(みたけレースラフティングクラブ)

多くの人と会い、多摩川のすべてを見つめ、流域を考えるために

沼倉さん

David さん

(トレッキング)

島田さん

(river commune)

市原さん

(二子玉カヌー部)

清野隆さん

(エコデモ財団理事)

清野朱里さん

堀井さん

安立さん

戸高さん

五十嵐さん

升田さん

流田さん

吉無田さん

(かわさき水辺の楽校・多摩川エコミュージアム)

牛島さん

石橋さん

前田さん親子

(うのき水辺の楽校)

佐川さん

中澤さん

(だいし水辺の楽校)

上原さん

(きぬたま遊び村)

片岡さん

岡本さん

(多摩川とびはぜ倶楽部)

TAMAGAWA DOWN THE RIVER

全行程マップ

2023/08/07~09

▼ : 発着地地点
 ▲ : 休憩地点
 ← : 風向、風速



目次

2p. 全行程マップ

3p. DAY 1 の発見

天からの一滴、基本下り、人間の営み

4p.

- DAY 1 行程マップ

5p.

6p.

- DAY 2 行程マップ

7p.

8p. DAY 2 の発見

風景、地形、生態系、
 太陽と私たちの位置関係

9p. DAY 3 の発見

歓迎と感謝の連続、
 疲労困憊と体力の限界、
 「心をひとつに」

10p.

- DAY 3 の行程マップ

11p.

12p. おわりに

ことの発端

2023 年 6 月、みたけレースラフティングクラブの柴田大吾さんが私たちの研究室に来てくださった。そこで中学生たちが多摩川 138km を登山とサイクリングとカヌーイングで 5 日間かけて下っているという話を伺った。心底羨ましかった。「僕たちもやりたい」と何気なくいったことが、柴田さんの頭の中で一瞬にして「じゃあ 3 日間でやりましょう」という言葉になって返ってきた。それがことのはじまりである。想像のできない状況で下りきれるかどうかという不安と、まだ見ぬ多摩川の水と自然が魅せる景色と体験への期待を織り交ぜながら、私たちは 8 月 7 日を迎えた。この旅はただ私たちが多摩川を楽しみ下るというレジャー、冒険ではなく、多摩川の自然の力と多摩川に関わる仲間たち全員のサポートを受けながら、流域を考えようと挑んだものである。本報告書を手に取っていただいた方には、多摩川流域が作り上げる生きものとコミュニティの豊かさを追体験してもらえればとても嬉しい。

オリジナルTシャツ

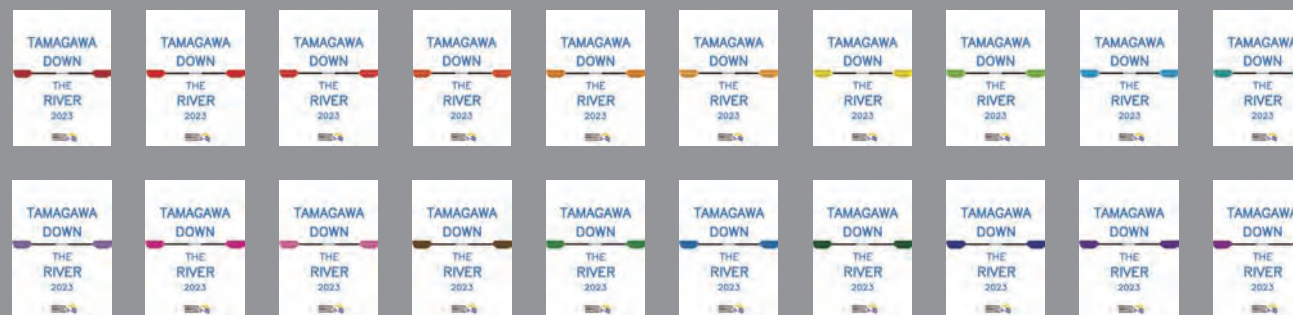
3 日間の多摩川下り専用の T シャツを色別で 20 着作成。行く先々で個の T シャツを着て各地の多摩川に関わる方々と記念撮影をした。



表

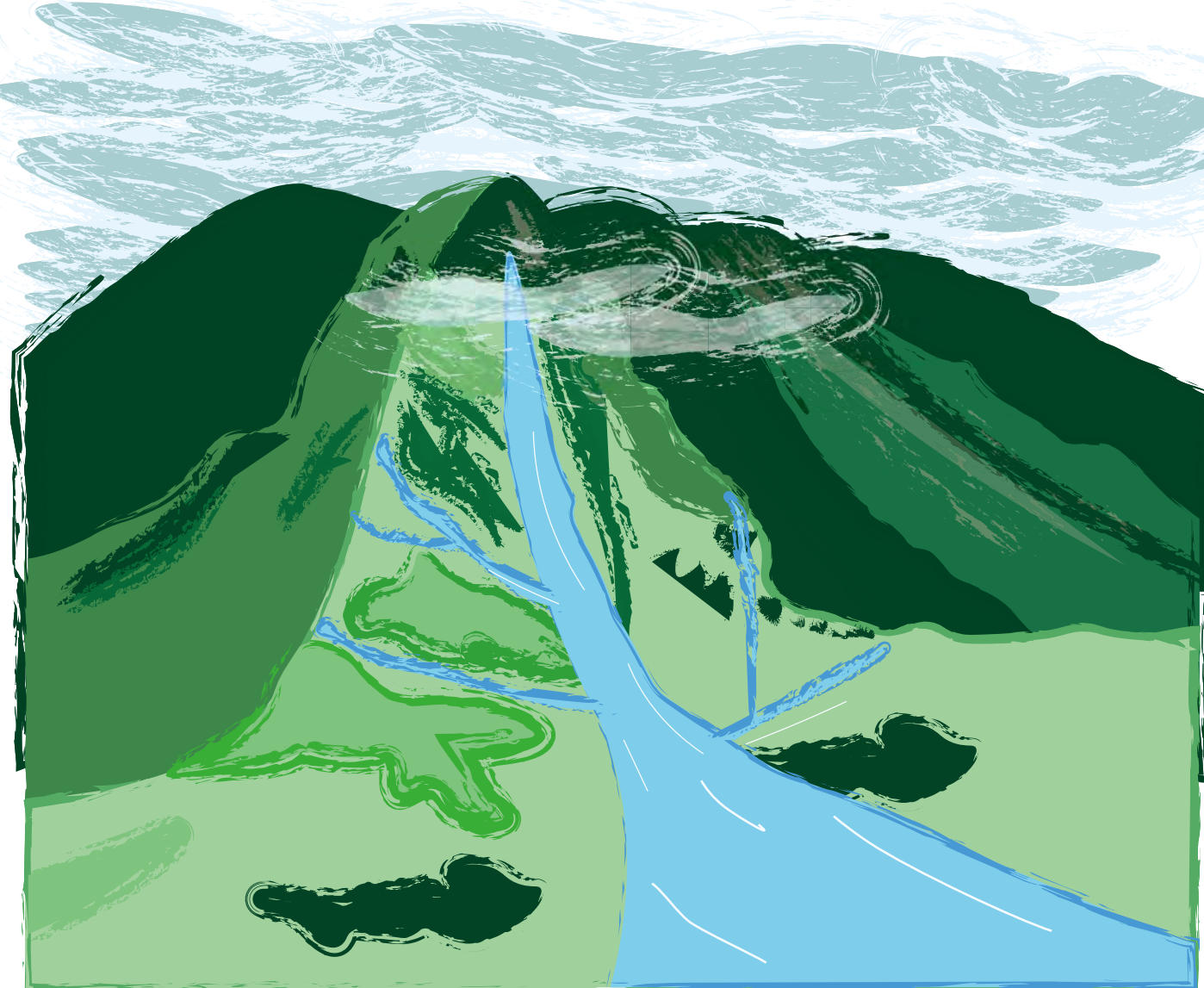


裏



裏はオールの色ごとに 20 種類作成

DAY1 8/7 05:30~17:30 水干→御岳



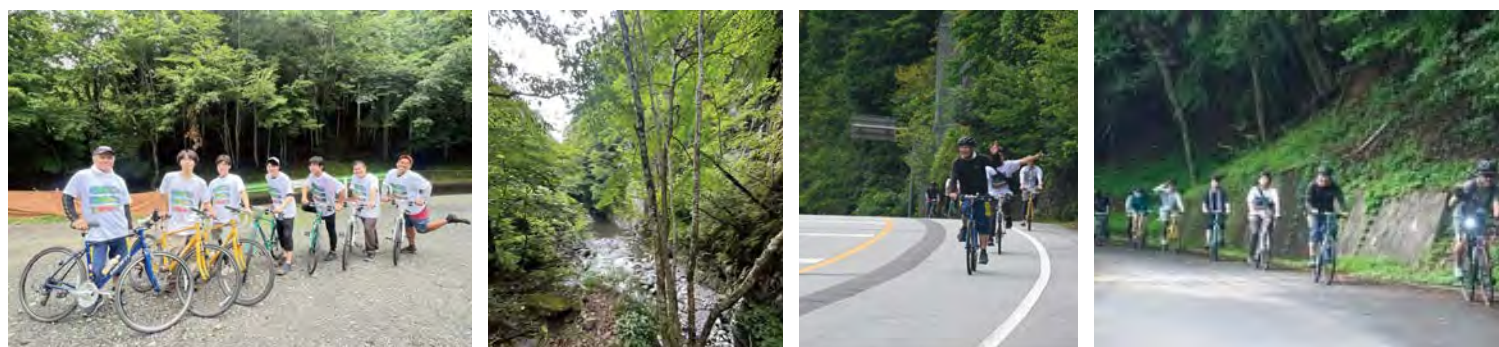
1 日目は御岳から笠取山登山口まで車で上る。そこから水干まで山登りをした。その後、登山口まで戻ってきて、御岳まで自転車で下った。水干で垂直に垂れる水を見て、そこから位置エネルギーによって下っていく体験をした。

天からの一滴

多摩川の源流は垂直だった。
雨が降り、水干から垂れる水は垂直で、その100m 先では私たちが想像するなだらかな川だった。
水干から垂れた水は土に染み込み、湧水として再び地表に姿を表し、川となっていく。水はミネラルを含んだ硬水として湧き出ており、仲間の中には普段私たちが飲んでる軟水の水との味の違いに気づくものもいた。
最初は細く、水量の少ない川がいくつかの支流と合流してだんだんと大きな川へと becoming いく。そこではまだ、この川が莫大な水量となり海へ流れ、その水が蒸発して雲となり、雨が降ることで、また戻って来ることは想像出来なかった。
笠取山の中は、広葉樹・針葉樹が立ち並ぶ森林と岩に繁茂した苔、川が作り出す風景が広がっていた。時折、森林の中から鹿が姿を表し、私たちの方をじっと見て立っていた。あれは私たちのことを歓迎していたのか、それとも警戒していたのだろうか。そんな自然に囲まれ山を上って行くうちに、自分自身が植物や動物等の自然の住みかに入っていくような感覚になった。



基本下り



人間の営み



笠取山登山口から御岳までの自転車道は基本下りだった。急坂の地点では自転車を漕がなくても 40 キロほどのスピードが出たことで、自分自身が持っていた位置エネルギーが運動エネルギーに変換されていくことを実感する。基本下りだと思っていたところにたまに上りがある。下りの中の上りのしんどさに、心が折れそうになる仲間もいた。位置エネルギー獲得の大変さを改めて感じた瞬間であった。
川の水も私たちと同じである。水干から垂直に落ちた水は大きな位置エネルギーを持ち、運動エネルギーに変換され、私たちが住む平地へと流れてくる。流れてきた水がその莫大なエネルギーを使い、地形を削ったり、土砂を運んだりすることで壮大な自然の風景が生まれると考える。

鮎は秋遅くに河口近くの瀬で孵化し、海へ降りた後、成長するにつれ冷水を好むようになり、川を遡上し始める。鮎は調布取水堰から八つの堰を越え、白丸ダムの大規模な魚道を上り、小河内ダムまで辿り着く。この小河内ダムには魚道はないため、鮎の遡上はここで終わる。鮎にとっては小河内ダム下まで上れば十分なのか、それとももっと上流まで行きたいのだろうか。そんなことを思いながら奥多摩湖を下った。小河内ダムは人間の生活に必要な電力を発電し、大雨時には水量を調整することで、洪水から人の生活を守る。人間が生活するためには、自然の莫大なエネルギーを利用しなければならない。しかし、それがアユなどの生態系の分離や自然の破壊をもたらすことにもつながることを改めて感じた。

DAY1 8/7 05:00~17:30

Yuki YOSHIDA Masato DOHI Daigo SHIBATA SYOKOTAN Koki HISAMINATO Akiyoshi MATSUSHITA Reishi MATSUNAGA Yuhei UEMOTO

水干→御岳

09:00

08:00

07:00

10:00

11:00

12:00

13:00

14:00

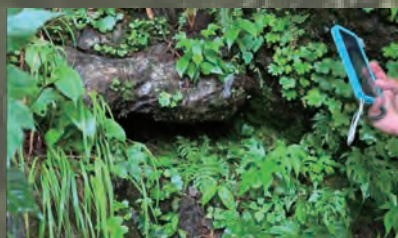
凡例

※名称不明

⚡: 橋

▬: 堰・ダム

└┘: 休憩ポイント



水干

多摩川の最初の一滴。緩やかに流れる下流とは違い、水干では垂直に水が落ちる。ここから多摩川 138km の旅がスタートする。水干から少し下ったところには、一度地面に落ちた水が湧き水となり出てくる。飲んだ瞬間喉の渇きが潤され、普段飲んでいる水と源流の水との水質の違いを感じる。



分水嶺

笠取山登山口から水干を目指して山登りスタート。少し眠さが残る中、入念に準備体操をして出発。登山口の入口あたりはまだ針葉樹が多かったがどんどん進むにつれて広葉樹が増え、樹種も多くなっていった。100 年前、人間の活動によって裸山となった場所とは思えないほど豊かな森であった。



笠取山登山口



笠取山登山中



水干下の湧き水



笠取山登山中



ぬかるみを進む

笠取山の中は植物や動物の住みかだった。霧に包まれた草原はマルバダケブキの黄色いお花畑となっていた。幻想的で美しい風景だ。森の中からは時折鹿が姿を現し、こっちを向いて立っている。山を歩いていると、そんな自然の中に自分自身が入り込んでいくような感覚になった。



もののけ姫のこだまの真似

水干

09:00

笠取山
登山口
START

07:00

12:30

River Level

ナメトロ (丹波溪谷)

13:30

06:00

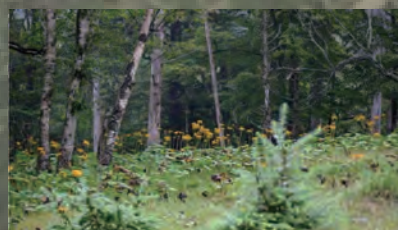
15:00



車から見た奥多摩湖



笠取山の鹿たち



笠取山のマルバダケブキ



登山口から自転車スタート



早朝、御岳を出発

いよいよ御岳から最初の目的地、笠取山登山口へ向けて車で出発。これから3日間、無事に生きて帰れるか、不安が8割、多摩川を下るわくわく感が2割だった。車中、壮大な奥多摩湖に山や空が反射する風景を見た。自然により偶然つくられた風景はとても神秘的であった。

水と緑のふれあい館

小河内ダム

道所橋

したくら橋

檜村橋

境橋

愛宕大橋

琴浦橋

南氷川橋

登計橋

氷川大橋

16:00

数馬峽橋

海沢

白丸ダム

鳩ノ巣大橋

雲仙橋

寸庭橋

万世橋

奥多摩大橋

05:00

GOAL
御岳

御岳橋



御岳到着

17:30



水と緑のふれあい館 (奥多摩湖)

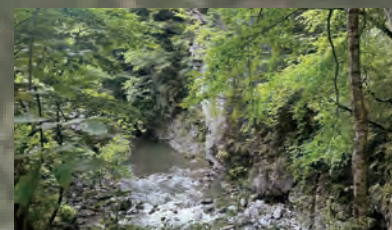


白丸ダムの魚道



下りの自転車道

お昼で飯を食べ終わり、沼倉さんとデイビッドさんからの説明を受け、いざサイクリングへ。舗装された下り坂での自転車はMax時速40km。風が気持ちよくて、楽しいけど、この速度だと風景は楽しめない。沼倉さんのわかりやすく、穏やかなインカムのガイドを頼りに下っていった。



ナメトロ (丹波渓谷)

サイクリングの道中、ナメトロや奥多摩湖、白丸ダムで休憩。ナメトロはその名の通りなめとったらかん。下の水面は見えないほどの岸壁である。白丸ダムからは魚道が見える。擬岩と真岩が混ざり合い、延々と続く魚の道は優しいデザイン。魚たちはこの長距離をとにかく登る。

DAY2 8/8 05:30~19:30

Yuki YOSHIDA Masato DOHI Daigo SHIBATA SHOKOTAN Koki ISAMINATO Akiyoshi MATSUSITA REISHI Matsunaga YUHEI Uemoto MARIA Tsuda CHITOSE Nakamura

御岳→南多摩



05:00



07:00

08:00

09:00

10:00

11:00

- 凡例
- ※名称不明
 - ⚡ : 橋
 - ▬ : 堰・ダム
 - └┐ : 休憩ポイント

START
御岳

05:30



準備万端、御岳出発

釜の淵

08:30

前は 3 時間ほどかけた釜の淵までの行程を 1 時間半ほどで下り、初めての休憩。これからの行程の長さを感じる。だんだんと両岸が開けてきて建物などの人工物が見えるようになってくる。人影は少ないが、時たま釣りをしている人がいたり、キャンプ場にゴミが落ちていたり人の活動の跡を目にする。



釜の淵にて休憩、準備を整えて再出発

羽村

10:20

羽村の堰にて多摩川を流れる水のうち実に 6 分の 5 が用水に引き込まれる。都市を潤すのに必要な水量の膨大さとそれを扱う都市の規模の大きさをを感じる。これほどの水量を取り上げて下流の生態系などに影響はないのだろうか。羽村から秋川が合流するまでの間、水が少なくなり、歩く回数が増える。



御岳にて、朝日を受けて



水の流れを感じながら進む



護岸ブロックでできた波を超える



青梅市民球技場近く



羽村で水が少なくなるので歩く



羽村取水口



草の中をかき分けて進む※

River Level
Sea Level

12:00

13:00

14:00

15:00

16:00

17:00

18:00

19:00

川沿いの砂岩層や土砂の堆積層が水の流れてによって削られ独特な風景を作っている。川底も波の形に滑らかに削られていて滑りやすく2回ほど転んだ。岩と水で作られた複雑な川底の間に多くの小魚がいるのが見える。カヌーが通るとびっくりしてあちこちに泳ぎ回り、水中できらきらと光っている。



二人乗りに慣れず転覆



流れが弱く渋滞する



浅瀬に乗り上げる、船を引いて歩く



川の上で集合写真

朝の出発の時は進行方向の川の上、木々の間に浮かんでいた太陽が今は背後のビルの間に見える。太陽とすれ違うようにカヌーを漕いだ一日だった。一日中晴れていたわけではないが、かなり日焼けをした。一日中、体は東を向いていたので、ずっと南側にあった体の右側が他より焼けている気がする。



振り返ると夕日が見える※



是政橋到着



地層がむき出しになった地形※



昭島にて、合流組と



夕日の中で船を引く※



2日目全行程を終えて

GOAL
南多摩

是政橋

南武線

大丸用水堰

関戸橋

京王線

府中四谷橋

石田大橋

中央道多摩川橋

日野橋

立日橋

中央線

多摩大橋

日野用水堰

昭和用水堰

拝島橋

14:00

羽村郷土資料館の館長島田さんをおかねてから交流のあった大吾さんより紹介していただいた。多摩川下っていくことで、多摩川を大切に思っているひととの多くの人との出会いがある。僕たちが川を下ることで上流も下流も一つの川であり繋がっているのだということを示す証拠となる。



多摩大橋上から

DAY3 8/8 06:30~18:15

YUKI Yoshida MASATO Dohi DAIGO Shibata KOUKI Hisaminato AKIYOSHI Matsushita REISHI Matsunaga YUHEI Uemoto YUDAI Masumitsu TATSUYA Ogura RYUSEI Murata RYO Ito

南多摩→羽田



07:00

08:00

09:00

10:00

11:00

- 凡例
- ※名称不明
 - 🚶: 橋
 - ▬: 堰・ダム
 - 🛶: 休憩ポイント



START
南多摩

是政橋

06:30

ついに最終日が始まる。前日までの疲労で体が重たい。応援に行くよ！と知らせて下さった方々に会えることを願い、カヌーを漕ぎ始める。全日参加メンバーはパドルの扱いに慣れてきた。3日目参加メンバーは初めての操作に苦戦し一部で不和が。堰で発生する流れに翻弄されてクルクルと回る艇も。



南多摩是政橋下



南多摩是政橋下流※



南多摩是政橋下流



多摩川原橋下流※



二ヶ領宿河原堰



南多摩是政橋下



二ヶ領せせらぎ館 2 階

二ヶ領せせらぎ館

10:00

3 日目最初の休憩は外の猛暑と対照的なクーラーの効いた部屋で体と心のエネルギーを補給。せせらぎ館の方々の笑顔が動力に。再出発時はカヌーを持ち上げ陸を歩く。水上では感じない重さに悲鳴を上げる。浮力に助けられている事に気づき再び水上へ。この区間は流れが少なく漕ぎ続けないと進まない。体力を武器に次のポイントへ。



二ヶ領宿河原堰下流



二ヶ領宿河原堰下流



宿河原堰下流



宿川原の堤防上※

きぬたま遊び村付近の堤防の上で上原さんが手を振って待っていてくれた。次の休憩場所の二子玉川までもうひと踏ん張りの元気をいただいた。雲行きがだんだんと怪しくなってきた。すぐに出発する。夏の入道雲が台風の雨雲か。空を覆う分厚い雲が日射を軽減してくれるがその反面、ゲリラ豪雨を恐れながらただただ晴れを祈る。



二ヶ領宿河原堰上流

二子玉川

11:30

新メンバーもパドルに慣れ、余裕が見え始める。雲がかかっているおかげでカヌーの上で寝ころび空を見上げられる。大吾さんが漕ぐ赤い艇に誰も追いつけない。必死に漕ぐ私たちを後ろに涼し気に駆けて行く。休憩を終えた直後、一艇転覆。浅瀬で助かった。発見した艇が救助に向かい、事なきを得る。

12:00



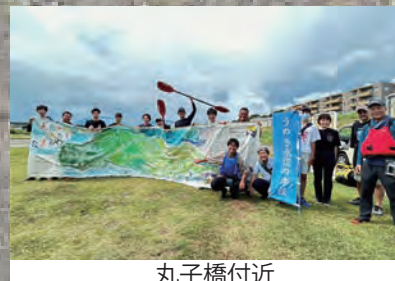
二子玉川 246 下※

13:00



丸子橋下

14:00



丸子橋付近

15:00



丸子橋下流※

16:00

河口に近づくとも海風が直撃し、向かい風が激しくなる。みんなで漕ぐがなかなか進まない。自然の力に左右される。心身の限界。もう時間がない。仕方なく心をひとつに、残りは 2.7km. tamagaWA の掛け声が初めて揃う。大師橋を超えると船や海の波が向かってくる。12m の船体が軽々と捻れる。離陸する飛行機が見える。羽田だ！

17:00



六郷橋下流

18:00



羽田第3ターミナル

2.7km を 15 分で漕ぎきる。鋭利な貝類が付着した岸壁に擦ればカヌーが破ける。細心の注意を払いながら岸に上がり到着。3 日間の旅を想い感動する。身体は重く、心は茫然としていた。

玉川

新二子橋 二子橋 新多摩川橋

丸子橋

調布取水堰

東急目黒線

丸子橋

東海道新幹線

12:30



二子玉川下流

川幅が広くなる、体力の限界で苦しくなる。ゴールはどこだ、海の雰囲気はする。前方には黒い雨雲が広がる。手を止めるわけにはいかない、ひたすらに漕ぐ。汽水域に入ると生態系が変わる。河口付近には大切な干潟が両岸に広がり、無数に空く穴からはさまざまなカニが顔を出す。とてもかわいい。近づくとともに姿を隠す。

ガス橋

多摩川大橋

京浜線

六郷橋

大師河原干潟館

大師橋

18:15

多摩川スカイブリッジ

GOAL
羽田

17:45



大師橋付近の干潟



スカイブリッジ下流



大師河原干潟館



ガス橋下

丸子橋ではうのき水辺の楽校の方々が旗を持ってお出迎え。昼食を取りエネルギー補給。中学生の前田君を乗せ下る。ロングバックラフトはとにかく早い。みんなで漕げば時速8km。時々速度が落ちる。なぜだろう。掛け声は聞こえる。ガス橋で前田君降艇。もう一度漕ぎ方を確認する。長い分方向転換が難しく、先頭の指示で全員を動かす。



多摩川大橋下流

DAY2 8/8 05:30~19:30 御岳→南多摩

2日目はいよいよ上流御岳からカヌーで多摩川を下り始める。午前はパックラフトで、昼過ぎからは女性2名を新たに加えて二人乗りダッキーで下っていった。丸1日下ってみて、多摩川が作り上げる風景、生態系、地形の変化を体験し、そして私たちが太陽とともにあることを再確認する。

風景



早朝に御岳を出発し、冷たい上流の水温を感じた。天候にも恵まれ朝日を目指すように上流から軽快に下って行った。中流付近になると、普段釣りをしている人であふれている土手は、台風の影響が全く人がいなかった。午後になり、上流から中流域にやってくると、徐々に水の流れが穏やかになり、水の量も少なくなる。水嵩が浅すぎること舟艇を押して歩かなければならないことが多くなり、気力と体力が削がれていった。また立つと足元にばかり気を取られ、周りの景色を楽しむことも少なくなっていた。次第に辺りも暗くなっていき、どの場所が水嵩が浅いかも判断しにくくなっていく。午前とは打って変わり、水の量に左右されることで、予想の到着時間よりも大幅に遅れてゴールの是政橋に到着したとき、疲弊した私たちを讃えるかのように後ろには美しい夕焼けが広がっていた。

牛群地形



1950年代に多摩川で砂礫の大量採集が行われ、牛群地形を構成する平山砂層が現れた。地層の歴史は約160万年前まで遡り、後の東京湾にあたる内湾の浅海性の地域で堆積したものと見られている。川に削られ残った細長い層の高まりが牛の群れに見えることから名づけられた。しかし近年の河川改修や気候変動による洪水の影響で、主要部分はほとんど消滅している。多摩川中流域に突如現れるこの幻想的で美しい地層の大群は、私たちを驚かせた。この地形がある空間だけ、他の河川領域と比べて時間の流れ方がゆっくりに思えた。

生態系



上流の水域は森や木々に囲まれ、朝の鳥の鳴き声が聞こえて心地よい。漕いでいる途中はトンボが遊びにやってくることもしばしばあった。水も澄んでいて、ホワイトウォーターでない限り水の中の状態がよく分かる。羽村までの間にはテトラポットが多数ある地帯がある。そこの下の部分では流れが激化し、もし足を滑らせてしまえば吸い込まれて抜けなくなってしまうほどである。川を下る我々にとって危険な場所であるが、同時に川に生息する生き物たちにも、この不自然な人工物は脅威的であるのは想像に難くない。堰を超えて中流域に入っていくと一転して、住宅街が見えるようになり、鳥たちの姿は見えなくなった。舟艇を押してみても初めて、中流域の水の底の岩々には藻が繁茂して滑りやすいことに気づく。水が少ないことと午後の照り付ける太陽の影響で水温も上流より高く、水辺の生き物も住みにく感じた。

太陽と私たちの位置関係

私たちを乗せた多摩川を乗せて、地球が自転した



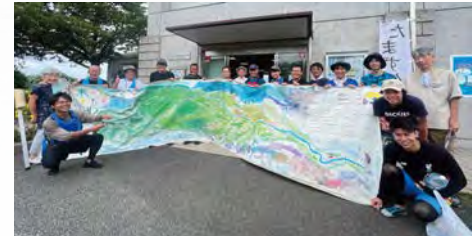
DAY3 8/9 06:30~18:15 南多摩→羽田

歓迎と感謝の連続



10:00
かわさき水辺の楽校（右岸）

ニヶ領せせらぎ館 23.0km ポスト



ニヶ領せせらぎ館ではかわさき水辺の楽校・多摩川エコミュージアムの方々に迎えられ、おにぎりやエネルギー補給と水分を補給。狛江花火大会の有料会場として準備が整う中にも関わらず、ダッキー 4 艇の堰越えをあたたく & 楽しくサポートしていただいた。

羽村市郷土博物館（右岸） 56.6km ポスト

羽村取水堰では、大吾さんを通じ river commune の島田さんに出迎えていただいた。この堰では、上流部からの水の殆どが生活水として取水されるため水量は激減。そのため羽村堰以降は浅瀬が続き、殆どカヌーには乗れず、持ち上げて歩き抜ける。ここから各地の予想到着時間を大きく越えて行くことに…

みたけレースラフティングクラブ



10:30
砧・多摩川あそび村（左岸）
河口から 20.4km ポスト
※以下“河口から”略
きぬたま遊び村



雲行きが怪しい中、きぬたま遊び村の上原さんが水辺まで応援に！当日、きぬたまの活動は雨天中止であったにも関わらず、疲労でボロボロの私たちを炎天下の元笑顔で応援いただき、私たちが見えなくなるまで見送って下さった。

疲労困憊と体力の限界



丸子橋からはさらにメンバーが加わり、13 人乗りのカヌーに乗り換え再び下り始めた。2 人乗りに比べ 13 人乗りのカヌーは速度が速く安心したのも束の間、体力の限界に漕ぐことを止めるメンバーが増え、時には 1/11 人しか漕いでいないこともしばしば …

また、多摩川はこれまでの中流部とは全く違う表情を見せ始める。午後の時間帯は潮汐力による逆流と強くなり、始めた海風は向かい風となり、私たちの体力を限界まで削る。川幅は広がり、大きなボラがそらで跳ね上がり、パドルからは塩水が垂れ、私たちは水上で停滞した。私たちは雑巾のようにくたびれた。



11:30
二子玉川カヌー部（左岸）
18.5km ポスト
二子玉川 246 高架下



二子玉川カヌー部の活動でおなじみの 246 高架下の着岸ポイントで、エコデモ財団理事の清野さん親子、二子玉川カヌー部の市原さんが応援に！ここで嵐のようなゲリラ豪雨を凌ぎつつ、差し入れのみたらし団子とおはぎで癒された。

12:30
うのき水辺の楽校（左岸）
丸子橋 13.2km ポスト



多摩川最後の堰である調布取水堰を超え、ここから潮汐の影響を受ける汽水域に突入。大吾さんとおきの”超ロングカヌー（13 人乗り！）”への乗り換え準備を進める中、うのき水辺の楽校の牛島先生、石橋さん、前田さん親子が応援に駆けつけて下さった。周辺の川の地形や遊びに詳しい”子どもスタッフ”の前田さんと一緒に、嶺町小～ガス橋区間を下れ新鮮な力と気持ちをもらった。

「心をひとつに」



長い旅路を渡りついに到達した大師では、潮の満ち引き海風といった厳しい自然現象にぶつかり私たちはそれぞれが限界を感じていた。羽田までの残る 2.7km を完走するために自然と声を掛け合い同じカヌーに乗る 11 人が「心をひとつに」ラストスパート、厳しい上潮と海風に立ち向かう。

17:45
だいし水辺の楽校（右岸）

大師河原干潟館 2.7km ポスト



漕げば漕ぐほど、海までの距離が広がっていくように感じてしまうほど、体力と精神の限界を迎える中、予定時間を過ぎながらも休憩のため訪れた干潟館では、だいし水辺の佐川さん、中澤さんにラストスパートの激励いただいた。羽田ゴール乾杯用のシャンパンまでいただき、干潟や葦原のカニたちにも見送られながら、ラストスパートへ。

18:15
多摩川とびはぜ倶楽部（左岸）
0.00km ポスト
羽田空港



ゴール地点はスカイブリッジ左岸。ここでは多摩川とびはぜ倶楽部の片岡さん・岡本さん、土肥研究室メンバーが私たちの到着を今か今かと待ちわびて下さっていた。普段であればとまらない私たちが「心をひとつに」してようやくたどり着いたゴール地点。応援に来て下さった皆さまの激励と差し入れのチーズやアイス・チョコ・小魚入りのナッツ菓子と枝豆の香りがする地ビールと手作りの紫蘇ジュース、そしてシャンパン。これまでの沢山の応援と達成感を噛み締めながら、集まった全員で笑顔の記念撮影。無事に下りきった喜びや経験は言葉にはならないけれど身体中をめぐり、皆さまとのつながりや多摩川の自然への感謝の気持ちが沸きあがる。

多摩川 138km 完走 多摩川とある歓び



三日間の疲労困憊の中で得たもの

1. 澄んだ一滴が澱んだ大河となり、空と土を通して再び澄んだ一滴となる循環の不思議
2. 人力、ではあるがそれは自力ではなく、水の力と他の人々の力に支えられた旅
3. 多摩川と共に在る仲間と出会う喜び

この冒険はみたけレースラフティングクラブの柴田大吾さんとしょこたんをはじめ、多くの人の力と水の流れに支えられて完漕しました。私たちを応援して下さった皆様に厚く御礼申し上げます。

多摩川の冒険を通じて、水干から落ちた一滴が無数の支流と合流し、下流の広大な多摩川になっていく姿を実感し、その流れに伴い上流、中流で出た川ごみもまた下流に集まることを実際に見ました。多摩川が人の憩いの場となり、自然の棲みかとなるには流域に住む人全員が多摩川について考え、行動することが大切です。

多摩川が私たちをつなぎ、つながった私たちが共に多摩川を見守っていけることを心から祈っております。

多摩川 138km 人力の旅の記録

多くの人と会い、多摩川のすべてを見つめ、流域を考えるために

発行：一般財団法人エコロジカル・デモクラシー財団

Mail: ecodemo.found@gmail.com

- ・写真はみたけレースラフティングクラブ
- ・※印の写真はエコデモメンバー